発行日　1990年1月20日発行（毎月20日発行）通巻96号
1982年8月16日第三種郵便物認可
ISSN 0289-6680

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.96
試行錯誤

カレンの少女

特集　ビルマへの道

柔軟にして多角的に …… 2
地球人として支えあおう …… 5
ビルマへの道 …… 6
国境からみたビルマの「民主化」 …… 8
ビルマの少数民族 …… 10
ビルマ小史 …… 11
今年からODAも使います …… 15
JVCにゅうす …… 18
研修生紹介 …… 20
JVCプロジェクト表 …… 21

JVC Japan International Volunteer Center

柔軟にして多角的に　1990年代を展望して

代表 岩崎 駿介

●三つの軸

今日から1990年代の10年が始まる。前にも記したことであるが，1990年代は人類にとって多難の10年になるだろう。西暦2000年に始まる21世紀は，1990年代に経験するであろう人間の意識の変革，あるいは国際的な政治経済的仕組みの変革などの数多くの試練の後に，初めてその光を見ることが出来る。

今月号は正月号でもあるので，新年にあたっての良くいえば抱負，悪くいえばホラを書くことにする。抱負にしてもホラにしても，行動を起こす前に口に出してしまうというような軽々しい状況には，本来ないのだが，新年の「夢間に見た事実」，あるいは「事実のあいだに見た夢」として整理してみたい。

私はこれからの歩みを見据えて，以下の三つの軸を設定したい。第一の軸は「プロジェクト」の軸である。第二は「組織的戦略」の軸である。そして第三は「活動の質」の軸である。この三つの軸をそれぞれに展開しながらも，相互関連性を高めていく。つまり一つの改善が他の改善を支え，促進させていくという相互関連性に気を配っていく。そして，この三つの軸を貫く最も特徴的なことは，「柔軟にして多角的」，一つが転けても皆が転けないということである。

●プロジェクトの軸

まず，第一のプロジェクトの軸から見てみよう。JVCは現在，アフリカのエチオピアとソマリアの二カ国，アジアのタイ，カンボジア，ラオスの三カ国の合計五つの国で活動を展開している。そして，三カ国で調査を開始している。それはアフガニスタン難民のいるパキスタン，ベトナムそしてビルマの三カ国である。アフガニスタン難民については，すでに二回，JVC神奈川の山口誠史氏が調査に入り，二回目の調査では風の学校の中田正一氏とともに農業プロジェクトを提案した。しかし，アフガン人のためのパキスタンにおける農業訓練という点において，充分な説得性を確保できず，再度の調査ということになった。ベトナムについては未だ途についたばかりである。JVCの活動の起点であったインドシナ難民問題の原因の一つとしてベトナム戦争を把え，かつ現在でも溢れるようにこぼれ落ちるベトナム難民との関連の中で，ベトナムを把えようとしている。しかし，ベトナムは複雑で把えにくい。ホーチミン市（サイゴン）を中心とする南ではなく，またハノイを中心とする北でもなく，中部ベトナムこそ現在のベトナムの困窮を最も代弁しているという意見もあり，適切な判断が可能になるまでには相当の時間と労力を必要とするであろう。そして，ビルマである。ビルマについての詳細は他の稿にゆずるが，タイの国内問題が周辺三ケ国に転嫁したという意味において，どうしてもその実態を把握しなければならない国である。

既存のプロジェクト五つを含めて，このような「アフガン」から「ビルマ」に至る海外における合計八つのプロジェクトは，政治的，あるいはそこに置かれている人々の生活状況的，さらに市場経済が拡大していく上での地球環境的な意味で，それぞれが特徴的な性格をもっている。JVCにとって資金的に取り組みやすい問題もあれば，取り組みにくい問題もある。市民の理解において同情的な段階にあるプロジェクトもあれば，日本政府の政策そのものを厳しく点検し，批判していかなければならないプロジェクトもある。JVCの活動は体制を補完する役割を担うものではない。過酷な状況にある人々に対する「人間的な連帯」こそが活動の基本であり，人間的なものを押し潰す体制的なものには，はっきりと意見を表明していかなければならない。

柔軟にして多角的。いろいろな経験が全体像を浮かび上がらせる。一国の問題は他国に転移すると同時に，飢餓の問題は環境の問題に，環境の問題は政治に，そして政治の問題はさらに人権の問題にと転嫁し，常に問題は複雑に交錯している。

●組織戦略の軸

第二の軸は，JVCの組織的戦略の軸である。組織戦略の中でもっとも重要なことは，日本の地域組織とどう結んでいくかということである。

現在のJVCの組織はネットワークという一種の線上に成立しており，地域的な核を十分に形成していない。JVCと関係の深い新潟，山形，神奈川，高岡，そして十分な活動を組みえていないが農場建設を中心とした東金などの地域がある。これら地域の最大の特徴は，地域の人みずからが原動力であるということである。決してJVC東京事務所からの一方的な働きかけで活動が成立するわけではない。冷たいようであるが，地域自身の問題である。

われわれJVCは，これらの地域の人に助けられ，有形無形の貴重な支援を受けている。地域との連携を強化していくには，私を含めて東京事務所の一人ひとりがより積極的に地域の人との連携を図っていくことである。同時に，地域の人も東京事務所への期待を積極的に申し出てほしい。地域と海外の地とを結ぶことが，JVCの本来の仕事である。また，各地に作られつつある国際交流協会やセンターも，地域接点の有力な要である。神奈川，大阪，川崎，豊田などには，真の海外交流を模索しようとしている人々がいる。

また，地域資金をどう第三世界の人々の生活改善に結びつけていくかという取り組みも，少しずつではあるが動き出している。神奈川における，県を中心とする民際外交事業，県レベルにおけるODAの模索，労組や生協を中心とする市民支援（Peoples to Peoples Aid），ポートウォークなど多彩な資金活動が展開されている。

組織強化戦略の第二は，ODA資金の導入である。ここで勘違いされると困るのは，ODA資金は組織強化のためにあるのではないということである。言うまでもなくODA資金は，JVCの組織強化のために一円たりとも使うことは出来ない。第三世界における具体的プロジェクト，それも建物の建設資金や車の購入資金としてのみ使うことができる。JVCにとっての試練はODAの資金を導入するため，それに倍加する自己資金を生み出さねばならないことである。しかし，JVCはODA資金を十分使いこなすことによって，組織としての脚力，組織としての力をつけていくことが出来ると考えている。

1989年度予算において，JVCは総額3千万円近いODA資金を事業補助金という形で得たが，私はこれを政府からODA資金の適正運用を委託されたのだと理解している。現在，鋭意これを執行中である。われわれとしてはその結果を今年の夏に正確に公表したいと思う。

アフガン難民キャンプの長老たち

JVC組織強化戦略の第三は，組織の財団法人化である。われわれは長年このことに努力しているが，いまだ実現することができない。今後，これに協力を申し出ていただく方と共に誠実に努力していきたい。

そして第四に，研究所の設立を考えたい。イメージとしては「JVC国際協力研究所」である。しかし，これも勘違いされては困る。研究所などというほどに大それたものではない。まず細々とした歩みを始めるのだ。この研究所はJVCが第三世界の現場で得た経験と知識を，系統的，組織的に市民に提供することを目的としている。そして，JVC内部にあっては，活動に参加した各個人の知見をより組織的に蓄積しようとするものである。研究所の運営はJVC本体におぶさるのではなく，調査の委託受注を基本として独立採算で行きたい。出版を重視し，第三世界における活動を基礎とする研究成果を報告し，日本の人により多くの事実を知ってもらうための開発教育に力を入れていきたい。

JVCの組織強化戦略の最後に，イベント企画の充実をあげたい。昨年1989年の暮れに，JVC東京事務所の一人，アイネス・バスカビルさんを中心に，マキシム・ショスタコヴィッチ指揮による「JVC ベネフィットコンサート・メサイヤ」が企画実行され，非常な成功をおさめた。これによって，JVCは1000万円以上の活動資金を得ることが出来た（詳細は，5頁参照）。

これは，バスカビルさんをはじめとする人たちの自発的な意志によって実現したのであるが，今後もこの種の企画が継続されることが期待されている。JVCの活動は，基本的に全て参加する人の自発的意志に委ねられている。したがって，たとえば私がここで「JVCはこんなことをする」などと言っても，実質的に何の保証もない。しかし，JVCの活動が重層的に組織され，一つの活動が他の活動を活気づけるという相互連帯的，相互起動的な役割を果たしえたら，これは第三世界の人にとっても素晴らしいこ

●活動の質の軸

第三の軸は，活動の「質的向上」の軸である。JVCの活動は「難民」救援から出発した。しかし，難民が真に救済されるには，それぞれの地において日常的な生活改善を図っていくことが必要である。このことからJVCは，「開発」の問題にかかわるようになった。しかし，タイやエチオピアの農村で生きていくための条件を確立すること，すなわち揺るぎない農業，林業，牧畜を確立するには，その地における生態学的な条件，つまり「環境」の問題に関わらねばならないことに気づいた。

JVCはこうして「難民」から「開発」へ，そしてさらに「環境」へと活動の枠を広げてきた。活動の枠は広がっても，目標となっているのは「地域の生活改善」である。

JVCにとっての重要な「質的向上」とは，現場でのわれわれの観察，判断などの総合的な理解能力の向上である。たとえば，私は前からエチオピアのマーシャ村でのプロジェクトを通して，村人の間に生活改善を試みようとする人たちに対する妬み（ねたみ）や嫉み（そねみ）があり，これが時として改善努力の障害になると聞かされてきた。しかし最近，アフリカの地域社会における妬み・嫉みはアフリカ社会に広く見られるもので，地域社会維持のために一定の役割を果たして来たと聞かされた。私は改めて，自分側の文化的脈絡の中でのみ相手を推断することの不十分さを思い知った。地域社会の伝統的な物理的条件や社会的条件を正しく理解し，それに基づく適確な施策提言がいかに難かしいかを痛感した。この意味で，JVCは今後，文化人類学者などとのより積極的な提携を進め，現場における活動を経験主義的なものに止めるのではなく，より論理的な成果を組み入れたものにしていかねばならない。

JVCが今後の10年を展望して，もう一つ身につけねばならないことは，政治構造的な理解を深めることである。ただし，決して理解のための理解としてではなく，具体的な行動を生み出すためにである。その意味で，ビルマは適確な材料だと思う。ビルマ政府，少数民族，熱帯林の伐採，日本のODA，タイとの関係などの問題が複雑に絡み合う状況のなかで，日本の市民支持を受けつつ何が出来るかをはっきりさせることはなかなか難しいが，着実に一つ一つ積み上げていきたい。

このような「現場での力」と「構造的な取り組み」というJVCプロジェクトの質的向上を心がけながら，同時に「NGO間の協力」についても，これをより積極的に推し進めていきたい。具体的には，開発問題に関わるNGOを中心として組織されている「NGO活動推進センター（JANIC）」をどのように強化していくのか，そしてJVCはその過程でどんな役割を果たすべきなのかが問われている。JANICは日本の11の開発NGOが中心になってできた団体であるが，関西などの諸団体と協力して，より強力な市民連合組織に脱皮していかねばならない。その意味で「全国NGOの集い」という企画を早急に実現したい。

また，昨年9月に「熱帯林行動ネットワーク（JATAN）」，「エンロピー学会」あるいは「地球の友・日本支部」などと共同して開催した「地球環境問題と日本の役割を問う国際市民会議」の延長上に企画されている地球環境問題に関する市民会議にも積極的に参加していきたい。今年4月22日に予定されている「地球の日（Earth Day）」への参加，あるいは1992年に予定されているストックホルム環境会議の「20周年記念会議」に向けて，地球環境問題に対する市民の理解向上に貢献していきたい。

●三つの軸の相互作用

以上，JVCのこれからの10年を展望して，「プロジェクト」「組織」「質的向上」という三つの角度から，頭に浮かぶことを書いてみた。しかし，JVCは繰り返すようであるが，あくまで参加する人の自発的意志の集合なのである。したがって，もとより私個人のJVCに関する未来展望など描くことはできない。ここに盛られている提案が，的を得たものであり，JVCに参加する多くの人が自分のアイディアとして共感し，行動する時，はじめてJVCの事実となる。したがって，ここに記した提案が「夢の間にみた夢」として消えてしまわぬように，皆さんに検討していただければ幸いである。

「陣とりゲーム」の最中に　サヨナラ。
（ベトナム，ホーチミン市第8区レ・ライ小中学校）

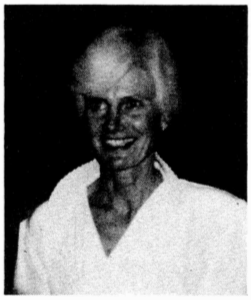
メサイアを唱う「ベネフィット・コンサート」

地球人として支えあおう

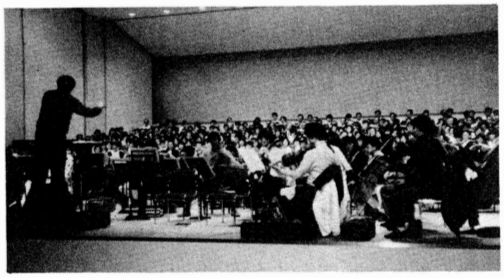
特別顧問　星野　昌子

去る12月8日宵，昭和女子大学，人見記念講堂でJVC主催の「ベネフィット・コンサート」が盛大に開かれました。今までに「ピアノ独奏」，「アンサンブル」等，数百名の聴衆を得て，各プロジェクトのため，コンサートを開催したことはありますが，今回のような本格的なものは初めてです。日本の人々が第三世界諸国の問題をよく知り，その解決のために，JVCのアジア・アフリカでの活動を通じて，世界の人々と協力することが可能であることを，もっと広く深く理解していただくことが目的です。勿論資金集めも欠くことのできない重要な目的の一つです。プログラムには，G．F．ヘンデルの「メサイア」が選ばれ，指揮のマキシム・ショスタコヴィッチ，及びソプラノ，メゾソプラノ，テノール，バリトンの四名の歌手を米国から招きましたところ趣旨に賛同して無償の出演を快よく承諾して下さいました。日本側では新日本フィルハーモニー交響楽団，及び郡司博氏指導による東京オラトリオ研究会，東京ライエンコーアに加えて，この公演のために六ケ月間厳しい練習を重ねてこられた「ショスタコヴィッチと共にメサイアを歌う会」の在日外国人を含む400名のアマチュアの方々が演奏に参加して下さいました。人見記念講堂を無償で提供していただいたことも大きな助けとなりました。

ユニセフ等国連機関のためにこの種のコンサートが行われることはあっても，NGO主催というのはまだ珍らしいためか，マスコミからも数々の取材を受けました。現在オランダに留学中の伊藤達男・幸子夫妻（もとエチオピア・コーディネーター）からも当日のラジオジャパンの放送でこのコンサートについてのニュースを聴き，感激と共に葉書が送られて来ました。開演直前に日本語と英語で挨拶したアイネス・バスカビルさん（写真）は，「今日12月8日は48年前，日本軍が真珠湾を攻撃した日にあたります。時は流れてもこの地球に絶えることのない戦いや災害の犠牲となる人々を忘れずに……」と真摯な口調で語りかけて会場の共感を呼びました。



アイネス・バスカビル



リハーサル風景

熱のこもった演奏に講堂を埋めた約二千名の聴衆は感動の渦に包まれて，終了後も拍手を送り続けました。大都会の華やかなコンサートで格調高い音楽に精神を高揚させ得る先進国民の私達が，単なるチャリティーではなく，一つしかない地球の同じ住民の一人として支え合う心境に到達することができるように，今後もこのような催し物を手がけていきたいと希望しています。終了後4名の歌手の方々は「合唱参加者の英語の発音が大変きれいで，まるでサンフランシスコ合唱団をバックにソロを歌っているような気がした」と大変喜んで下さり，私達も感激致しました。収益は未収の宣伝費を含めると一千四百万円が予想されます。これだけの成果を挙げることができたのは，参加者が全ての経費をボランタリーに支えて下さったからに他なりません。収益は児童人権擁護(タイ)，僻地巡回医療診療（カンボジア），生活改善指導養成センター（ラオス）総合的農村開発（エチオピア）を運営するための経費として送られます。ご参加の皆様本当にありがとうございました。

各プロジェクトの受益者に替って御礼申し上げます。

ビルマへの道

岩崎 駿介

私は，約3週間前にタイとビルマとの国境に行って来た。バンコクから国境までの道のりに往復2日，国境で2日，合計4日の旅である。

この小論では，私がなぜビルマに興味をもったか，そして今回の訪問で何を見たかについて報告したい。しかし，JVCとしてはビルマにどうかかわるか未だ正式な見解を持ち合わせていない。いろいろな意見があるが合意形成に至っていない。それだけ難しい問題である。したがって，ここでの意見は，そのような合意形成に役立てばということでご理解いただきたい。

●タイの延長としてのビルマ

まず，一番重要に考えていることは，JVCは今まで10年にわたってタイの問題に関わってきたが，いまやタイ国内の問題がビルマを含む周辺3ケ国に移ったということである。

タイはフィリピンにおける政情不安や，韓国や台湾などのNIES諸国における雇用賃金の増大によって，先進工業諸国からの投資が急激に高まり，市場経済の農村部への浸透や都市における雇用が促進され，JVCが取り組んでいるスラムや農村にも大きな変化が押し寄せている。タイ政府は「戦場から市場へ」というスローガンの下に，インドシナ諸国との商業的取り引きを増大させ，カンボジア，ラオス，ビルマの周辺3ケ国を経済的に従属的な位置に組み込みながら，NIESへの仲間入りを果たそうとしている。これらの周辺国は，すべて社会主義であって西側との直接取り引きを持たず，その資源輸出はタイを経由するという，タイにとっては願ってもない条件が作りだされている。

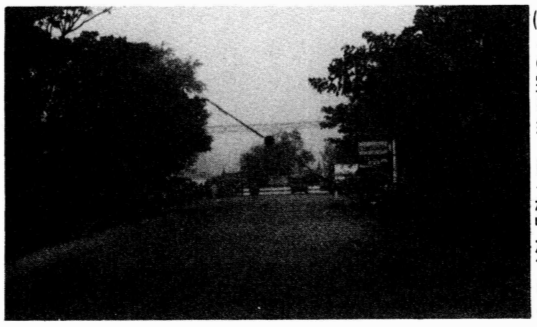
1988年の11月，タイ南部で起こった洪水によって300人以上の人が亡くなったが，タイ政府はこれを契機に自国内の森林をこれ以上伐採しないことを宣言した。しかし，同時にこれは周辺3ケ国からの木材輸入を促進することを意味していた。チャワリット将軍のビルマ訪問，チャチャイ首相のラオス訪問，商業使節団のカンボジア訪問などがあり，昨年3月25日にはカンボジア木材の第一船がバンコク港に入港している。

ビルマの問題は，このような状況変化の中で，タイの問題の延長として浮び上がって来た。実際，JVCはこの間，タイにおけるカンボジア難民の解決を求めてカンボジア国内にプロジェクトを開き，またラオスへの帰還難民を追ってラオスに入り，首都ヴィエンチャンに生活普及員養成センターを開設してきたのである。

●人権抑圧としてのビルマ

ビルマを考える第二の視点は，ビルマ国内における人権抑圧の危機と，それと関連して日本の政府開発援助（ODA）の問題である。カンボジア難民は，カンボジア国内の虐殺の悲劇によって作り出された。JVCにとってカンボジア難民を助けるということは，カンボジア難民と同じような状況を二度と作り出さないということである。その意味で，今のビルマが問われている。現政権の政敵であるアウン・サン・スー・チー女史は軟禁され，連邦制を志向する少数民族は過酷な武力弾圧のもとに居住地を追われている。これらに抗議して政府援助の凍結を続ける先進諸国

(1) メーソットの対岸ビルマ軍基地の旗がみえる



(2) この突き当りに「橋」ができる

の中で，日本政府は昨年2月にODAを再開した。問題は極めて政治的で複雑である。

●国境で

私の見たビルマ国境について触れたい。タイとビルマとの主要な接点は4ケ所ある。南から北へと順番に並べると，バンコクの西カンチャナプリから北上した「スリー パゴダ パス」周辺のモン族の地域，タークから西に入った「メー ソット」の対岸に位置するカレン族の地域，さらにチェンマイ北西の「メホン ソン」対岸のカレニ族の地域，そしてラオスに近い「メーサイ」の向いに位置するシャン族の地域の4つである。

私は今回，メー ソットの対岸にある，ビルマ軍がカレン族を武力によって押しのけて建設した基地を遠望し〔写真(1)〕，同時にすぐ近くにある国連アジア太平洋地域委員会（ESCAP）が計画し，日本などからの資金援助が期待されている「橋」の建設予定地を見学した〔写真(2)〕。その後，自動車で国境線に沿って北上しながら，国境線のタイ側に並ぶように作られている幾つかのカレン族の難民キャンプを覗いた〔写真(3)〕。これらのキャンプには，キリスト教関係の団体を中心として組織されたNGOグループが，難民が必要とする食糧などの生活物資の50%を支給するという方式で，援助を続けている。難民キャンプは，写真で見るようにまったく一般の村と同じ形をしており，移動や出入りに制限はない。この方法は，カンボジア国境と異なり，難民の自主性を最大限尊重するために採用された方法であるとの説明を受けた。見学第一日は，メー ソットから10時間近いドライブの後に，メー ホン ソンに至りそこで宿泊した。

翌日は，ビルマ軍に蹴散らかされて現在ではタイ領土内に逃げ込んでいるカレニ族の学生キャンプを訪れた〔写真(4)〕。彼らは非常に慎ましやかで，追われている緊張間は隠せないものの気負いを感じさ

(3)カレン族の難民キャンプ

(4)学生キャンプで話をきく

せず，これから先の困難に備えて淡々と事に対処しているように見えた。午後になって，彼らの案内でタイの木材会社がビルマ政府との合法的契約の下に，カレニ族地域内の森林（チーク材）を伐採し，タイ側に運び出している現場を見に行った〔写真(5)〕。あいにく，材木は既に遠方に運びだされた後であったが，材木伐採に従事しているタイの会社の現場責任者から，伐採の現場はビルマ国境を越えて25キロの所に位置しており，希望するなら案内してもよいとのことであったが，日暮近くになり引き返さざるを得なかった。

●これから

JVCが行動を起こして行くためには，いまだ十分な確信を得ることが出来ない。われわれの行動は一旦動き出すとなれば，持続的でなければならないので，私としては，より継続的に問題を把握していきたい。いかなる人に対しても十分な説得性を得ることが出来るかが問われている。

現段階では，以下の3つの問題が焦点である。(1)日本の市民として，日本のビルマへのODAがどのように利用されているかを把握し，適切な提言をしていくこと。(2)国境線上の難民や学生に対して，人道的援助は可能であるかを検討すること。そして(3)ビルマ国内における少数民族に対する圧迫や，今年5月に予定されている総選挙の行くえを注視していくこと。ビルマについて，多くの方からのご意見を期待したい。

(5)ビルマからの材木貯木場

国境からみたビルマの「民主化」

曹洞宗ボランティア会
バンコク事務所スタッフ　中尾 美奈子

今年2月，初めてビルマ国境にある学生キャンプを訪れた。学生たちとの出会いはとてもショックだった。ジャングルで暮らすビルマの学生と，ぬるま湯に浸かったような私の大学時代。格子模様のロンジーをはき，丁寧に私の質問に答えてくれた学生が，私と同い年である事を知った時，彼の落ち着いた物腰に，厳しい境遇が人間をこんなにも成長させるものかと改めて驚いたものだ。

あれから約10ケ月。今，私は一つ疑問に思っていることがある。国境で何十年もの間，ビルマ政府に対し抵抗を続けてきた少数民族にとって，「民主化」とは一体何を意味するのか。国境の難民たちにとって，「民主化」とは一体何なのか，という問いである。

ビルマ国内の民主化陣営，及び海外在住のビルマ人が苦戦を強いられている現在，こういう問いかけは，あまり現実的ではないかもしれない。しかし，国境の難民の状況を見るにつけ，88年以来の一連の民主化運動が彼らにとって一体何であったのかを，あえてもう一度問い直してみたいという気持ちを強くしている。

ビルマ人のためだけの民主化であってはならない，民主化から取り残される人々があってはならないと強く思う。

国境の少数民族勢力にとっての“DEMOCRACY”

国境で抵抗を続ける少数民族勢力にとって，“DEMOCRACY”とは一体何なのか。

少数民族ゲリラのリーダーが，“DEMOCRACY”を口にする時，私にはそれが少数者としての，精一杯の自己主張のように聞こえてならない。彼らにとって，「民主化」とは，ビルマ人と同等の権利を獲得することに他ならない。

ビルマの民族問題には，実は日本も無関係ではない。植民地時代のイギリスの分割統治，第二次世界対戦中の日本軍の介入は，ビルマの民族間の対立を一層根深いものにした。確かに，日本軍，特に「南機関」がビルマの独立闘争に与えた影響は大きい。しかし，日本占領時代に多くのカレン人が迫害されたことも又，事実なのである。この後遺症は大きい。それに加え，ネ・ウィンの偏狭なナショナリズムは，ビルマ民族中心の政策を拒否する少数民族勢力を，さらに国境へ押し出す結果となった。

ビルマ民族中心の政策は，現政権でも全く変わりがない。それは，今年5月27日に約束された総選挙に対する政府の対応からみても明らかだ。今年の選挙に向け，政府は選挙権，被選挙権をめぐり，全国の成人を以下のように分類していると言われている。

1. ビルマ人―選挙権，被選挙権とも有す
2. 混血ビルマ人―選挙権のみ有す
3. ビルマ国籍をもたない少数民族―選挙権，被選挙権とも無し

尚，混血ビルマ人の鑑別に関しては，2世代前まで家系を溯って調査をしているという。

BSPP（ビルマ社会主義計画党）政権の少数民族政策に関しては，根本敬氏(注1)の講演録に詳しい。氏は，少数民族の抵抗運動の中に文化的にビルマ民族に同化されてしまう事への恐れをみておられる。私も以前，今はなきモンのリーダー(注2)，NAI NONLA氏にお会いした時，氏の発言にモン人としての高い誇りを感じた。ビルマ人という多数者の前では，少数民族のアイデンティティ等全く問題ではない，という政府の対応は，人間の精神に対する暴力としかいいようがない。

国境の難民たちにとっての“DEMOCRACY”

では，国境の難民たちにとって“DEMOCRACY”とは一体何を意味するのであろうか。

現在，ビルマ―タイ国境には，カレン難民約2万，及びカレニ難民約2千人がいる。ビルマ国軍の攻撃が激化する乾季には，この数はさらに増える。今年も本格的な乾季に入り，1,200名の新たな難民の発生が報じられた。

彼らにとっての“DEMOCRACY”とは一体何なのか。多少の抗議，反対意見を恐れずに私は言いたい。国境の難民にとって，“DEMOCRACY”とはまず何より内戦を止めることに他ならない。ビルマ国軍と少数民族との戦いには，見えない形で様々な外部勢力が入りこんでいることも事実であろう。国境の経済的な権益（国境貿易の利権，チーク材等の天

然資源の売買）が問題をより複雑にしている。

しかし，こうした争いは，国境に住む一般の村人にとって，どんな意味があるのだろうか。一時的な停戦にせよ，それが如何に困難なものかは素人の私でもよく解る。しかし，内戦終結への具体的なアプローチが模索されない限り，国境の難民たちにとって“DEMOCRACY”とは単に言葉上のものにすぎないように思えて仕方がない。

村人たちの人権も完全に無視されてきた。学生たちが国境に逃れてきた事から，ビルマ国境が，国際社会の注目を集め，ビルマ国軍の辺境での横暴ぶりがとりざたされるようになったが，ビルマ国軍の国境の村人に対する人権侵害行為は決して今日始まったものではない。略奪，強制労働，強姦，殺害という極端な人権侵害が日常化していても，その不当性を訴えるところもなかったのである。

学生たちと少数民族

学生たちが国境にきて，一年以上経つ。現在，約3千名の学生たちがビルマータイ国境にいる。

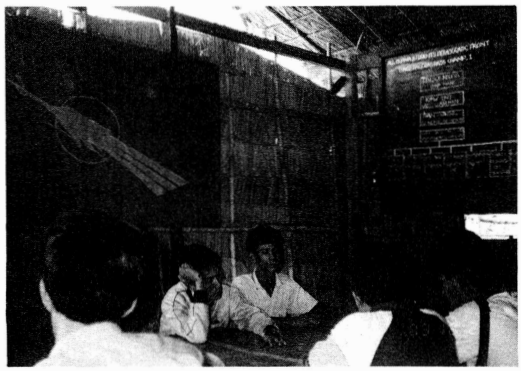
学生と，国境の村人とでは，生きてきた境遇が明らかに違う。当初，私には，学生たちの砦かヒロイックな“DEMOCRACY”を村人がどう受け止めているのか，という一抹の不安があった。

だが最近，学生の中に積極的に地域の村人と関わっていこうという姿勢が見られるようになった。医学部の学生は，キャンプ内の病院で，村人たちを診察する。キャンプ内で，カレン語やモン語を学ぶ。カレニ領にいる学生は村の青空教室で教鞭をとっている。カレン領の学生キャンプでは，学生たちが付近の村に出かけていって，村の問題を共に考えていく努力をしている。

大勢の学生たちが国境へ来ざるをえなかったということは，確かに不幸な事ではある。しかし，今までこうした辺境の現状を，一切知らされることなく生きてきた学生たちと，国境の村人たちとがお互いに理解しあう絶好のチャンスでもある。

こうした努力は体制を変革する速効力とはなりえないだろう。が，私はこうした学生たちの地味ではあるが，地道な努力の中に，将来の平和へつながる可能性を見ている。

最後になったが，日本でビルマの民主化に向け，活躍しておられるビルマの方々，及び日本の方々に心から敬意を表したい。日本で活動しておられる方の献身的な努力には，本当に頭の下がる思いがする。



学生キャンプ、スリーパゴダパス一〇一

ビルマの民主化は，今や国内問題ではない。特に，人権という視点を欠いた日本政府の外交方針，ビルマ経済を結果的に混乱させ，軍事政権を擁護する日本の援助は責任を追求されて当然であろう。

しかし一方，諸外国の「反ビルマ政権キャンペーン」に微かな不安を感じるのは私だけであろうか。“DEMOCRACY”と“HUMAN RIGHTS”という言葉は明快であるが故に，切り捨てられてしまう問題があるような気がしてならない。ビルマの民主化を考える時，民族問題を避けて通ることはできない。国内の民主化陣営，国境の少数民族勢力が共に“DEMOCRACY”を唱えるとき，敵は同じでも，新体制に対する要求はおそらく同一ではないであろう，という事を忘れてはならない。今はSLORC（国家治安回復委員会）体制という共通の敵がいるから両者のいう“DEMOCRACY”の相違など，さして問題にならないのかもしれない。しかし，ビルマの民主化をもっと長期的に見た場合，両者の考える“DEMOCRACY”の食い違いが，又新たな亀裂を生みはしないか。私たちはこの国境の「民主化陣営」に対してどういう姿勢で臨むのか。又，国境の難民たちは国際社会に対し，自分たちの境遇の不当性を主張するすべさえ持たない。“DEMOCRACY”，“HUMAN RIGHTS”を唱えるとき，我々はこうした声なき人々の存在にも注意を払うべきではないだろうか。

ビルマの民主化をとりまく状況は，ますます厳しいものとなりつつある。そして，「昂揚」もいつかは冷めるというのも，又，事実のようである。ビルマの民主化も長期戦の様相を呈し始めている。我々も長期的なビジョンに立って，ビルマの民衆を支援していく必要があるだろう。

注1　BURNING BURMA
　　アムネスティ・インターナショナル日本支部作成
　　1989年5月7日発行
注2　1989年8月，心臓発作のため死去

ビルマの少数民族

四倉幹木

四倉さんは，早稲田大学の２年生で，昨年ビルマ国境の学生キャンプで１ケ月生活しました。

カレン族の難民キャンプ

ここはビルマとの国境に近い，タイ西部の町メソット郊外にある，カレン族の難民キャンプである。

低い，暗い空から激しいスコールが地面を叩きつける。素足の幼女がびしょ濡れになりながら，よろよろと大きな水がめを運んでいく。家のなかでは日に焼けた顔に深い皺を刻んだ老人たちが，ぼんやりと雨を見つめている。ドーンと遠くから砲声が響いてくるが，彼らの目は何の表情も示さない。

このキャンプの人口は３千人を少し越える。車の通る道から，ぬかるみの小道を30分ほども歩かなければならない，不便なところにある。キャンプの外側には小さいながら難民が自分たちで作った水田があり，すでに田植えが終わっている。

雨季に入る前は，国境を越えたこのキャンプにまで，ビルマ政府軍によって砲弾が撃ち込まれたとのことであった。

タイは難民大国である。周辺社会主義諸国の政治的・経済的不安定によって，大量の難民が流入し続けてきた。ベトナム，ラオス，カンボジアからの難民については，日本でもよく耳にする。しかし，それ以前から続いている，ビルマからの少数民族の流入については，ほとんど知られていない。

少数民族とビルマ族

ビルマは，地球上の他のほとんどの国と同じように，多民族国家である。国名ともなっていた支配民族ビルマ族のほかに，カレン，カチン，モン，シャン，チン，アラカンなど，たくさんの少数民族が住んでいる。そのほとんどは山岳民族で，おもに山間部で水田耕作，焼畑耕作を営んでいる。ビルマ政府は，約三千九百万人のビルマ総人口の七割近くを，ビルマ族が占めていると発表しているが，実際にはもっと少ないのではないかともいわれている。残りは非ビルマ族である。

現在，ビルマの地に住んでいる民族のうちで，歴史的にみて，一番遅く入ってきたと言われているビルマ族は，その人口にものをいわせて，11世紀以降，支配者として他の民族の上に君臨してきた。

第二次大戦が終わると，少数民族の間に，ビルマからの分離独立を求める動きがでてきた。その頃，ビルマ族の間でも，英国からの独立運動が盛んであり，ビルマ族の指導者は，自治権と，将来におけるビルマからの分離独立権をちらつかせて，少数民族の協力を求めた。少数民族はそれに応じ，ビルマ族とともに対英独立闘争に参加した。

ところが，1948年にビルマが英国から独立を勝ち取ると，新政府は各少数民族にさきの約束より大幅に制限した自治権しか与えなかった。とりわけ，カレン族には自治州すら与えなかった。

それゆえ，カレン族は，自治権を求めて全国各地でデモ行進などによる抗議運動を展開したが，軍隊による厳しい弾圧を受け，運動に参加していない多くのカレン族の人々までが虐殺されるに及んで，翌1949年，ついに武装蜂起した。

少数民族の戦う理由

1949年に始まった内戦は，それから40年を経た今でも続いており，むしろ，ますます激しさを増している。40年の間にカレン族だけではなく，カチン，シャン，モン，アラカン，パオ，ラフなどの民族が次々とラングーンのネ・ウィン独裁政権に対して叛旗をひるがえした。

内戦の過程において，少数民族のビルマ政府に対する抵抗は，単に独立を求める戦いから，自らの生存をかけた戦いへと変質してきた。それは，1962年のクーデターによるネ・ウィン政権の成立によって，政府の少数民族政策が転換してきたことに呼応する。それまでの，少数民族に自治権を与えながらもできるかぎりビルマ族のコントロール下におこうという政策に代わって，少数民族そのものの存在を消滅させようとする，民族圧殺の政策が，ネ・ウィンによって強化されたからである。ビルマは資源の豊富な国である。木材，石油，天然ガス，その他のさまざまな鉱物資源に恵まれている。貴金属や宝石なども多く，どれもこれも先進工業諸国がのどから手が出るほど欲しいものばかりだ。そして，それらのほと

んどは少数民族の住む山間部に手つかずで眠っている。

それゆえ，40年来の内戦において，政府軍の矛先はゲリラそのものより，むしろ普通の生活をしている一般の少数民族たちに向けられていたと言える。政府軍による虐殺や掠奪をさけるため，現在に至るまで難民となってタイを目指す少数民族が絶えないのである。そして，一旦難民となって逃れてきた男たちのほとんどは，ビルマでの平和で豊かな生活を取り戻すために，ゲリラとなって武器を取り，再びビルマへ出撃していく。打ち続く内戦で，そうした少数民族ゲリラたちはどんどん低年齢化し，尤も激しい戦いの行われているところでは，十三，四歳の少年たちが抵抗の主力となっている。

少数民族の現在と未来

1977年，カレン，カチン，シャン，モン，ラフ，アラカンなどの各少数民族軍は，民族民主戦線（NDF）という，ビルマ政府に対する統一武装組織を結成し，それ以降，さらに活発な闘争を展開するようになった。

'88年9月，ソウ・マウン将軍のクーデターと軍事政権の成立，それにともなう民主化運動弾圧によって，多数のビルマ学生が少数民族解放区であるタイ・ビルマ国境のジャングルに逃れてきた。少数民族と学生は，互いにビルマにおける民主主義と自由の獲得を目指す共闘者として手を結んだ。少数民族は学生を保護し，食料を与え，学生は少数民族軍に軍事訓練を受けて，戦闘に参加し始めている。

ところが，'89年に入って，学生たちを追うようにして，40年にわたる内戦始まって以来の政府軍の大攻勢が開始された。これによって，カレン族は国境の重要拠点を次々と奪われ，北部ではカチン軍が総司令部を落とされるなど，各少数民族は現在，これまでになかった民族存亡の危機に直面している。ビルマからの難民流出も，これにともなって急増している。さらに，中立を守っていたタイ政府も，軍事政権側に歩み寄りはじめており，どこからの援助も受けていない彼ら少数民族の生存をかけた抵抗は，孤立無援のまま運命の中に溺れ消えようとしている。

ビルマ小史

編集部

11世紀：中央ビルマに仏教王国パガン王朝が建設される。モン族からもたらされた上座部仏教が信仰され，多数の堂塔や伽藍が建設された。

1896：イギリス領インドに編入され，イギリスの植民地となる。

1942：日本軍統治始まる。44年独立闘争の指導者アウン・サンは広範な抗日戦線を組織。

1945：戦後，再びイギリス支配となる。47年2月，アウン・サンと少数民族の代表はパンロンで独立のために協力することに合意。しかし，47年7月アウン・サンと6人の大臣は新憲法起草後，暗殺される。

1948：1月，独立。ウー・ヌーがビルマ連邦の初代首相になる。しかし，これとほとんど同時に5つの民族グループが，新政府に対して「パンロン合意を順守していず，自分たちに正当な代表権が与えられていない」と武器を取った。

1962：この間経済は停滞し，1962年2月たびたびのクーデターの後にネ・ウィン将軍が権力を奪取し，軍人からなる革命評議会を結成。4月30日，評議会は自力更生と外交中立を柱とする「ビルマ式社会主義」を宣言。63～65年にかけて，主要な産業部門を国営化する。
その後，1988年までの26年間一党独裁（社会主義計画党＝BSPP）を続けるが，経済政策に失敗。

1985：高額紙幣の廃止に対して学生の抗議行動。87年には一部の市民も加わり数百人が逮捕される。

1988：3月と6月には，大規模な反政府デモ。軍と警察の弾圧は峻烈を極め，発砲による死者，

7月：負傷者多数。7月末，社会主義計画党（BSPP）の臨時大会で独裁の地位にあったネ・ウィン議長は退陣し，強硬派のセインルインが政権につくが，なすすべもなく18日間で退陣。

8月：その後，文民のマウン・マウン政権が登場し，

複数政党制への移行を約束したが，計画党支配の下での投票に信をおかず，反政府勢力は暫定政権の樹立を要求した。これに対して，

9月：ソウ・マウン将軍率いるビルマ国軍は，9月8日にクーデターを起こし，各地で非武装の学生や市民のデモに銃弾を浴びせ，数千人の人々を殺害して全権を掌握した。

11月：ビルマ政府による弾圧を逃れて，3千人以上のビルマ学生が国境のキャンプに滞在し，「全ビルマ学生民主戦線（ABSDF）」を結成。学生たちは国境でのマラリヤに悩まされながらも，カレン，モン，カレニ族などの少数民族と共闘。

11月30日，100％の民間外資を認める外資法を制定して外国企業の直接投資を促す。また，軍事政権成立時に底をついていたという外貨を緊急に獲得するため，チーク材，象牙，宝石，骨董品などの競売，さらに少数民族居住区の森林伐採権，漁業権を外国企業に売却。

タイ南部で森林伐採を原因とする洪水が起り，死者300人以上を数える。タイ政府はこれを契機にタイ国内での森林伐採を禁ずる。

12月：12月14日，タイのチャワリット陸軍司令官は世界の要人で始めてソウ・マウン政権を公式訪問し，国境の学生帰還問題およびビルマ国内の森林伐採と伐採木材のタイへの搬出を話し合った。この頃からビルマ政府軍のカレン民族支配地域に対する攻撃は強化され，ビルマ人のタイ側への脱出を促する。

1989：1月25日，日本のビルマへの援助関連企業で組織されている「日本ビルマ協会」は，軍事政権の早期承認と援助再開の要望書を日本政府に提出。この要望書（資料1参照）には，企業がビルマ向けの滞貨で困っていること，さらにタイ，シンガポール，マレーシア，韓国などの資本がビルマに進出しており，これに遅れをとってはならないと記されている。

2月：2月17日，日本政府はアメリカ，イギリス，フランス，カナダなどの西側先進諸国が援助の凍結を続ける中で，始めてソウ・マウン政権の承認に踏み切り，援助を再開した。

5月：日本からの政府援助は，軍事目的の使用を禁じてはいるものの，工業化プロジェクトのトラックが軍用に転用されているという疑惑が出てきた。（5月22日朝日新聞，6月18日，毎日新聞）。

6月：タイ国境のビルマ学生キャンプの一つ，スリーパゴダパスのリーダーは「日本人への手紙」と題する書簡（資料3参照）を発表し，日本の市民に日本のビルマ向け政府開発援助の再開を再考慮するよう求めている。

国際協力事業団（JICA）は，外務省への報告書の中で，「日本のビルマ向け政府援助は，工業化に貢献せず，失敗であった」と述べた。

7月：7月に国民支持の厚いアウン・サン・スー・チー女史（国民民主連盟（NLD）書記長），ティン・ウー氏（同議長）ら野党指導者は，自宅に軟禁された。

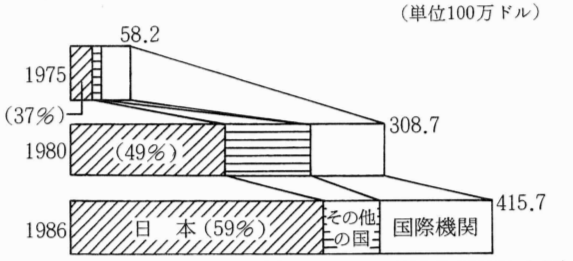
10月：ビルマ軍事法廷は，民主化運動の際に4人の警官を殺害したとして，11人の市民に死刑判決。また，タイ政府は，タイ国内に逃れたビルマ学生に国外退去を通告。

11月：新聞報道によれば，現在，43のタイ木材会社がビルマ政府と契約を結び，チーク材等の硬質木材生産高は30万立方mに達すると見込まれている。

タイ・メソットに建設が予定されているタイ―ビルマ友情橋の建設についての調印が行われた。また，500人以上のビルマ人がビルマ軍の迫害を逃れて，メソットの国境を越えてタイ側に避難。

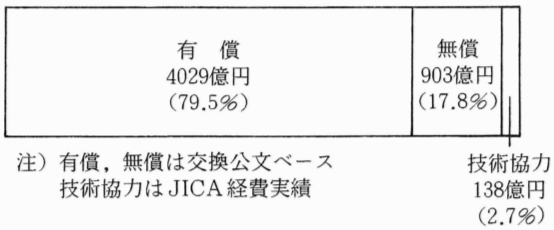
第1図　ビルマ：外国援助受入額と日本援助の割合

（単位100万ドル）



（出所：DAC外務省経済協力局）

第2図　日本の対ビルマODAの内訳（1968～'87年累積）



注）有償，無償は交換公文ベース
技術協力はJICA経費実績

（出所：外務省経済協力局，「我が国の政府開発援助」）

「現代農業」11月増刊号より転載

〔資料1〕

要望書（日本政府に対する）

平成元年1月25日

日本ビルマ協会

ご高承の通り，ビルマに於きましては，昨年9月18日ソウ・マウン軍事政権発足以来ここに4カ月を経過しましたが，ビルマ国内に於ける治安と行政機能は，ほぼ正常に復し，在留日本人に対する退去勧奨も一部解除され，また，昨年12月18日以降外国人の観光客もビルマに入国出来るようになりました。

一方，日本政府のソウ・マウン政権未承認により，ビルマに対する日本の既契約経済協力案件について，その船積ならびに請負者派遣が，現在抑制されているため，各プロジェクトの現地工事が中断し，また，既存工場の稼働もストップしている状況にあり，かつまた，4プロジェクトの如きプロジェクトは，資材不足により工場運営も多大の支障を来たしております。

之等の各種プロジェクトは，ビルマ経済再建には不可欠のものであり，之等の中断により，ビルマ経済は，益々困窮化し，更にまた，日本側関係業界に於いても巨額のビルマ向け滞貨を抱える等，深刻な困難に直面しております。

上述の如き経済援助中断により，過去長年親日的であったビルマとの友好関係が損なわれつつあることを甚だ憂慮している次第であります。

また，当協会としまして，もし来る2月24日の昭和の天皇の大喪の礼へのビルマ弔問代表の参列も認められないということになれば，元来天皇陛下に対する尊敬の念も強く，日本との関係が深い国であることより，今後のビルマとの関係にしこりを残しはしないかと心配しております。

つきましては，上記の実情にかんがみ，関係各方面におかれましては，以下要望事項について早急にご善処賜りますよう切にお願い申し上げます。

（以下略）

この資料は「東南アジア通信」より抜枠して転載

〔資料2〕

国民民主連盟（NLD書記長はアウン・サン・スー・チー女史）の少数民族問題についての考え方

ビルマ連邦は，すべての国民の団結と熱意にささえられて成立した。

独立以後40年の歴史は，ほとんど悲劇とも言える不幸な出来事の連続であった。最北端から最南端に至るビルマの国境地帯には，その数13を下らない武装ゲリラグループが播居している。それによって，国力は剥がれ，資源は奪われている。国家予算の40パーセントを国防費に割かねばならぬ状況は，国の発展を大きく阻害している。

こうした事態に鑑み，我々は何としても，少数民族問題の永続的な解決を図らねばならない。以下のような原則にもとづいて最良の解決を図りたい。

- 連邦を構成するすべての民族は平等の権利を有することの確認。
- 誠意と友好の念。
- 友愛と親密の情。
- 相互の信念の尊重。
- 基本的人権の相互尊重とその確認。
- 夫々の言語，文化，伝統を発展させたいとする少数民族側の希望の承認。

以上の原則を尊重することによって，我々は，連邦諸民族の平和と調和という大目標に到達できるものと信じる。

連邦の進歩と繁栄を希求する立場から，我々は，障害を取り除き，経済発展をもたらしうるような状況を生みだす方向に，専らその力を注がなければならない。

少数民族の本来の権利としての自治権を出来る限り尊重しつつ，連邦全体の発展を確保することが，我々「連盟」のめざすところである。

「田辺寿夫氏の試訳に基づいて作成した」根本敬氏の資料より

〔資料3〕

日本人への手紙　1989年6月

全ビルマ学生民主戦線　中央委員会
スリーパゴダパス地区議長
ゾー・オー

私たちは，日本の皆様に対し深い感謝の意を表するためにこの書簡を書いております。今まで日本の皆様は多額の御好意を私たちの国に寄せて下さいました。私たちは最大の援助国である日本，借款の80％を占める日本に対し感謝してきました。

ラングーン政府は，我々の民主化運動を残忍にも武力で弾圧しました。この事実に対し，不承認という立場を明らかにした日本の対応にかつて我々は非常に勇気づけられたものです。又，日本政府は経済援助も凍結するものと確信していました。

しかし突然，あなた方の政府はソオ・マウン軍事政府に承認を与えてしまいました。この承認に伴い，実に多額の援助が外貨不足に悩む軍事政府に対し再開されました。

私たちは日本のように民主化された国が，何ケ月もの間民主化を要求してきたビルマ民衆を見放したことにとても驚きました。我々は又，日本の行為が軍事政権を助け，我々の民主化闘争をなしくずしにしてしまうのではないかと恐れました。

しかしながら，我々はこの日本政府の行為を，日本が軍事政権との話し合う場をもち，改革するよう圧力をかける政策に切り替えたものと解釈し楽観的に考えました。

ビルマ民衆をもっと適切に，もっと建設的に支持する方法をめぐって，日本政府の対ビルマ政策を分析したいと思います。

まず第一に，日本政府の私たちの選挙に対する見解は，全面的に軍事政権の約束を信頼しています。しかし，ここで見落としてはならないのが，ビルマ国民の軍事政権に対する信頼度の問題です。ソオ・マウン軍事政権はビルマ国民の意に反し，政権を獲得しました。現政権は何千人もの市民の命を奪いました。現在に至るまで，夜間外出禁示令が施行され，自由な政治活動は全て禁示されています。これでは民衆に近づくこともできません。野党とリーダー達は絶えず軍に悩まされています。逮捕も頻繁に行われています。多くの学生指導者達が裁判抜きで，牢につながれています。民衆は恐怖におののきながら生活しています。このような状況下で，どうして自由で公正な選挙が行われ得るでしょうか。民主主義というものは，人々が組織化やキャンペーンに参加し，考えを分かち合い，問題を討論し，政府を選び，国の権力をコントロールすることによって始めて実現するのではないでしょうか。

第二に，日本の経済援助はビルマ軍事政権向けのものだということです。ビルマ経済の過去の歩みを思い出して下さい。ビルマ経済はどん底に落ち込み，国連の最貧国に指定されましたが，その責任は社会主義計画党にあります。ソオ・マウン軍事政権がこの社会主義計画党の後継であることは，軍出身の幹部全員がもと社会主義計画党員だったことからも明らかです。過去の政府の官僚体質と，汚職を鑑みるに，現政権が外国からの援助を適切に使えるとはとても思えません。

第三に，政府が新規の援助を差し止めているにもかかわらず，多くの日本企業がビルマに進出しました。森林伐採権と漁業権に関する契約が多くの日本企業との間でとり交わされています。私たちの意見からすれば，これら短期のビジネスはビルマ経済の抱える根本的な問題解決に何等貢献することなく，人々をさらに苦しめるだけだと思います。このようなビジネスは多くの弊害を伴います例えば，アンダマン海でほそぼそと漁業を営んできた多くの漁民達が今大変な困難に陥っています。簡単な道具しかもたない彼らは，近代的設備を搭載した漁業会社にとうてい太刀打ちできないからです。又，森林伐採の契約により，大量の木が切り出され，私たちのいる国境も森林破壊が進んでいます。

第四に，軍事政権は私たち国民に国家予算の詳細を一度も発表してきませんでした。これら外国企業との契約によって落ちるお金がビルマ一般民衆を助けることはありません。専門家の意見，さらに27年間にわたる私達自身の経験から，国家予算の大部分が軍事のために使われていると思います。従って，あなたがビルマに投資する全ての円が軍に流れ，銃弾を買う為に使われ，何千ものビルマ人の命を奪う事になるのです。この事実はビルマ国軍の活動の活発化にともないさらに顕著です。大量の国軍がタイ，ビルマ国境沿いの少数民族のグループ及びビルマ国内から逃れてきた学生達のキャンプを攻撃しました。私達のキャンプは破壊され，何の暴力にも加担したことのない多くの学生達が命を落としました。

最後にビルマ民衆と供に民主化闘争を勧める私達学生は日本の皆様に以下の事項を日本政府に強く訴えていただきたいと思います。

1）ビルマ問題を再検討し，ビルマ民衆を救うためのより有効な政策を採択する。
2）ビルマ経済の立て直しのための長期的経済協力計画を打ち出す。
3）軍事政権に対する経済協力及び開発プロジェクトを至近距離から監視する。

私達学生はビルマがいつの日か，民主主義と平和を獲得し，あなたの国からの援助で，豊かなビルマを建設できると確信しています。私達はあなた達の善意を必要としています。

ビルマが正常化し，真の民主主義を獲得した時はじめて日本とビルマの協力関係がさらに意義のあるものになり，より建設的な関係になるであろうことを，私達学生は強く確信しております。

この文章はACFOD（Asian Cultural Forum on Development）ニュースレター72号より抜粋（1989年4～6月号）

外務省からのNGO補助金

今年からODAも使います

事務局長　林　達雄

NGOの開発プロジェクトに対する外務省の事業補助金制度（正式名：国際開発関係民間公益団体補助金，総額1億1千万円）が本年度から始まりました。JVCではカンボジア，タイ，ラオス，エチオピア，ソマリアで行われている5つのプロジェクトの予算の一部を申請していましたが，総計29,498,000円の交付が決定しました。以下その用途を説明します。

1）僻地巡回診察，カンボジア
（8,620,000円）

交通の不便なプノンペン郡周辺部の村々の巡回母子保健活動充実のための車両購入，村の保健婦・助産婦の訓練費用，日本人保健婦の人件費，薬品代，またRINEセンター産科棟の建設費に使います。

2）子供活動センター建設事業，タイ
（11,001,000円）

孤児，親に虐待された子供，両親が離婚し置き去りにされた子供，路上で放浪する子供など，保護を失って困窮状態にある子供を収容して生活の場を提供し，同時に学校教育も行うタイのNGO：Foundation for Better Life of Childrenと共同でこれらの児童のための施設をバンコク郊外に建設します。

3）生活改善指導員養成，ラオス
（5,877,000円）

ラオス農村部の3つの県の生活改善普及センターの建設費およびラオスからタイへのスタディツアーをはじめとする指導員養成に使います。

4）農村復興事業，エチオピア
（2,500,000円）

植林をはじめとする農村復興を行っているマーシャ村までの道路事情は極度に悪く，車の消耗が激しい。そこで4輪駆動車とパーツを購入します。

5）小規模かんがい施設建設，ソマリア
（1,500,000円）

日本人が引き上げた後も，定住した難民たちによるかんがい農業が継続できるよう，かんがい用ポンプの部品を購入します。

以上の用途のうちカンボジアの保健婦の人件費を除いては建設費や機材の購入費等ハードの部分で占められています。これは今回の補助金総予算のうち8千万円がハード（物）にあてられており，JVCにも資材，機材費を申請するよう外務省から要請されたからです。もちろんJVCのプロジェクトにもモノは必要ですが，それ以上に人に関わる費用が大切です。この補助金制度は来年度以降も継続するようですが，ソフトの部分の割合をいかに増やしていけるかが，今後の課題の1つです。この補助金制度を通して，ODAに対して代案を提示する，というNGOの機能が問われているとも言えます。

今回JVCが日本政府からお金を受け取ることによりNGOとしての独自性を失い，政府の援助のありかたに対する充分な批判ができなくなることを心配される方があるかもしれません。しかし今回JVCが受け取る補助金はJVC今年度予算の11％であり，財政的に依存することはありません。来年度以降も原則的に20％以下におさえ，市民からの寄付金とのバランスをとっていきます。もちろんODAに対して批判すべきところは，しっかり批判していくつもりです。私たちはNGOがODAを使うことをより積極的にとらえ，対象となる人々にとって，より役に立つ代案を提示することだと考えています。

また，この補助金によって各プロジェクトの資金調達の負担が多少なりとも軽減されるわけですが，このエネルギーをJVC独自の開発教育にむけ，市民から集めた税金であるODAを市民に対して還元していく予定です。

1989年度補正予算書

収支補正予算

（自 1989年4月1日至 1990年3月31日）

（単位：円）

支出の部			収入の部		
科目	金額		科目	金額	
	補正後	補正前		補正後	補正前
＜事業費＞	**(201,370,062)**	(187,049,062)	＜補助金収入＞	**77,245,446**	(47,747,446)
(1) 西崎憲司記念技術学校	8,520,100	8,520,100	**政府開発援助（ODA）**	**29,498,000**	0
(2) パナニコム日本語学校	3,689,850	3,689,850	UNHCR	47,747,446	47,747,446
(3) 地域開発	**17,958,130**	6,957,130	＜寄付金収入＞	**166,171,856**	(181,348,856)
(4) 農業による自立促進	**44,386,531**	49,686,531	個人	21,348,856	21,348,856
(5) 難民帰還事業への支援	5,537,315	5,537,315	団体	**145,679,000**	160,000,000
(6) 総合的復興促進計画	52,889,000	52,889,000	＜会費収入＞	(6,000,000)	(6,000,000)
(7) 技術学校，井戸掘り，母子保健	**40,620,000**	32,000,000	＜機関誌購読料収入＞	(1,100,000)	(1,100,000)
(8) 女性生活改善指導員養成	19,646,136	19,646,136	＜その他の収入＞	(2,000,000)	(2,000,000)
(9) 定住難民	4,795,000	4,795,000			
(10) 人材派遣	3,328,000	3,328,000			
＜管理費＞	(39,647,240)	(39,647,240)			
＜調査費＞	(1,500,000)	(1,500,000)			
＜予備費＞	(10,000,000)	(10,000,000)			
合計	**252,517,302**	238,196,302	合計	**252,517,302**	238,196,302

(3) 地域開発（タイ－バンコク市内，ブリラム県M村）

科目		金額 補正後	金額 補正前
a. 一般会計			
	人件費	848,530	848,530
	地代	63,600	63,600
	研修費	34,450	34,450
	旅費交通費	47,700	47,700
	事務経費	34,450	34,450
小計		1,028,730	1,028,730
b. 奨学金			
	奨学金	1,643,000	1,643,000
	特別活動費	206,700	206,700
	人件費	1,320,580	1,320,580
	車両交通費	169,600	169,600
	事務経費	111,300	111,300
小計		3,451,180	3,451,180
c. 図書館			
	図書購入	222,600	222,600
	備品費	53,000	53,000
	活動費	53,000	53,000
	人件費	346,090	346,090
	事務経費	47,700	47,700
小計		722,390	722,390
d. 農村開発			
	活動費	233,200	233,200
	人件費	625,930	625,930
	車両交通費	254,400	254,400
	事務経費	132,500	132,500
小計		1,246,030	1,246,030
e. その他の活動			
	子供のかけこみ寺建設	**11,001,000**	0
	人件費	415,520	415,520
	その他	93,200	93,200
小計		**11,509,800**	508,800
合計		**17,958,130**	6,957,130

(4) 農業による自立促進（ソマリアーマガネイ難民キャンプ，ジャララクシ難民キャンプ，ハルバ難民キャンプ）

科目		金額 補正後	金額 補正前
プロジェクト費	物資購入	**8,215,187**	13,515,187
	車両・機械維持	1,889,694	1,889,694
	人件費	15,300,175	15,300,175
	住居維持	810,000	810,000
	輸送・交通費	621,500	621,500
	その他	184,375	184,375
プロジェクト管理費	人件費	8,606,100	8,606,100
	車両・機械維持	1,000,000	1,000,000
	住居事務所維持	2,592,000	2,592,000
	調査費	1,846,500	1,846,500
	その他	3,321,000	3,321,000
合計		**44,386,531**	49,686,531

(7) 技術学校，井戸掘り，母子保健（カンプチアープノンペン市他）

科目		金額 補正後	金額 補正前
プロジェクト費	技術学校	16,036,000	16,036,000
	母子保健	**13,361,000**	4,741,000
	井戸掘り	5,393,000	5,393,000
プロジェクト管理費	人件費	3,000,000	3,000,000
	事務所維持費	1,330,000	1,330,000
	旅費交通費	1,500,000	1,500,000
合計		**40,620,000**	32,000,000

バザーで育んだ国際ボランティアの芽

昨年11月21・22日の2日間，新潟市の東北電力グリーンプラザでJVCラオスプロジェクト支援のためのバザーが開かれた。数多いバザーの企画の中でも今回の催しは一味違っていて，「地域といかに結ぶか」というJVCの課題に一つの可能性を示しているように思われる。

きっかけはJVCのラオス担当の谷山が新潟で講演会をしたことであった。しかし，たった2度の訪問のうちにJVCの活動に理解ある人の間でバザーの計画が膨らんでいき，最後には協力してくれたボランティア団体10数団体，宣伝のために協力してくれたテレビ，ラジオ，新聞などのマスコミ機関5社，集められたバザー用品千点以上という，JVCがこれまでにかかわったバザーとしては空前の規模のものになった。

結局210万円もの収益が上がり，うち1万ドルがラオスプロジェクトに寄付されることに決まった。残りは今後も継続して行うバザーの運営資金と，長期的にラオスを支援していくための寄付金のストックに使われるという。

どうしてあの雪深い越後の国の人々が，日本では知る人とて少ないラオスの支援のために，ここまでしてくれたのだろうか。今どこでもブームになっている「国際化」の風潮の中で，第三世界に，それも周辺のさらに周辺に位置する小国ラオスに目を向け，そこと結んでいこうとするのは，1つの反骨精神ではないだろうか。しかしこれは単なる反骨ではなく，自分たちの地域の独自性を見つめ直そうとする情熱の現われなのではないだろうか。バザーを企画した新潟大学の多賀秀敏教授や彼のゼミのメンバー，佐藤幸雄夫妻やJVC OBの中川勇和君らはこう考えている。「新潟がラオスと結ぶことによって，きっと中央と地方，日本とアジアの系列化した関係を打破でき，アジアと共に生きることのうちに真に新潟らしい地域の発展のあり方が見えてくるのではないだろうか」と。

多賀さんたちはこの考えを実現するために，バザーで協力してくれた人たちの支援を得て新潟国際ボランティアセンター（NVC）の創設に向けて動き出した。新潟から地球発信する，民間国際ボランティア団体NVCの創設会員参加の呼びかけが，今行われている。3月には第一回総会とスタディー・フォーラム，4月か5月には第2回バザー，5月には海外プロジェクト支援のための海外調査，夏には青年海外スタディーツアーと企画予定は目じろ押しである。新潟が日本の「国際化」地図を塗り変えるかどうか見守りたい。

（谷山）

NVC連絡先：025－268－2035（佐藤英子）
025－262－6490（多賀秀敏）
025－268－4263（中川勇和）

朝日社会福祉賞 受賞

1989年度の朝日社会福祉賞が3者（2名，1団体）に贈られ，「第三世界の難民救援と住民の自立支援に尽くした功績」でJVCも受賞しました。

タイの首都バンコンで創立されて10年，延べ1000名を超えるボランティアが活動し，その活動を物心両面で支援して下さった多くの方々あっての受賞であると受け止めております。

尚，1月3日付の朝日新聞の中で「最高顧問・代表」と星野昌子が紹介されていますが，星野は現在「特別顧問」であり，岩崎駿介が「代表」です。

特別ボランティアのお願い

同封のご案内にもありますように3月17日(土)にJVC創立十周年記念「感謝の夕べ」を開催します。NGOらしく，手作りの会にしたいと思いますが，何分人手が足りません。展示用のパネルを作ったり，当日，現場（エスニック）料理を作ったり，会場の整理をしてくださったりする方を探しております。力をお貸しいただける方は，東京事務所の鴇田（ときた）（TEL 03・834・2388）までご連絡お願いいたします。

定住難民支援

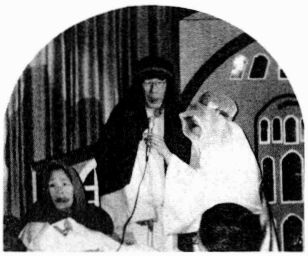
ケアハウスさくら苑

定住難民プロジェクトを支援して頂いている団体のひとつに，横浜市の「さくら苑」がある。ここでは，「特別養護老人ホーム」という冠が似つかわしくないほど多彩な活動を展開している。地域や海外からのお客さんと共に国際交流のイベントを開催したり，お年寄りが積極的に街や旅行に出かけたり，と自由で活動的な雰囲気がいつも漂っている。

その「さくら苑」で昨年の秋から，国内定住をしたインドシナ難民を支援するためのバザーをやりはじめた。地域の人々から家で眠っている品々を提供してもらい，それをバザーによってリサイクルする。その収益はJVCを通じて，神奈川県内に多く定住しているインドシナ難民の支援に使われる，というわけだ。

昨年は，501,025円，今年は680,722円の支援金を頂き，主に定住難民の文化活動のために使わせて頂いている。国際交流から国際協力へと，より人々のニーズに迫る活動が，こうした福祉施設から巻き起ってくるのは，何ともうれしい限りだ。　（小野）

人に与える喜び　聖ヨゼフス老人ホーム



JVCの大切な支援団体，聖ヨゼフス老人ホームのクリスマス会に参加した。車椅子でマリアの役をやるおばあさん，緊張で声のでなくなった挨拶役のおじいさん，微笑ましい場面の続く出し物の後，恒例のクリスマスプレゼントが渡される。サンタクロースから利用者（老人たち）たちへのプレゼントに続いて，日頃ホームのお手伝いをしているボランティアの人へのお礼。最後に難民へのプレゼントとして，利用者が出し合った寄付金がJVCへ渡された。

「施設の人々は人からもらい慣れている。もらうことに慣れ切って心が貧しくなっている。人に与えることの喜びをお年寄りたちに何とか知ってもらおうと思って海外で協力活動を実際に行っている団体に6年前から寄付を始めた。」20年以上も前から様々な施設で働いてきた寮母の野津さんの言葉が印象的であった。このクリスマス会に参加して私自身も元気になった。こうした施設とつながることはJVCの誇りだと思う。　（林）

2,500本の木がエチオピアに　サンモール・インターナショナルスクール

12月19日，横浜のサンモール・インターナショナルスクールを訪ねた。先日，同校よりグリーン・フォー・アフリカ募金に10万円の寄付を頂いたのだが，そのお金の集め方というのが，ちょっとユニーク。

以前お知らせしたエチオピアからの来日スタッフ，ダニエルとエシャトーがサンモールへ行ったのは，10月16日のこと。2人が演じた森林伐採の危険を訴える劇を見た小学生たちは，すぐさま自分たちもアフリカの緑を守るために何かをしようと考え，担任の先生と相談して募金をすることにしたそうだ。

募金をする前日，小学生たちがみんなで手をつなぎ♪Green for Africa Donate tomorrow♬と歌いながら，中学生や高校生の教室を回って募金を呼びかけると，みんなとても驚いていたそうだ。普段から，チャリティーや何かの行事をする時は，まず高校生や中学生が率先して小学生へ伝えるのが，いつものパターンだからだ。

サンモールには小・中・高校生全員を3つに分けた，たて割りグループがある。当日は廊下にアフリカ大陸の大きな地図を描き，そこからそれぞれのグループの色である赤・白・青の3本の線を引いた。その線上に端から，集めた硬貨を順に並べていき，どのグループが1番早くアフリカ大陸にたどり着くかを競争したそうだ。結果は赤・白・青の順で，その金額はおよそ10万円にもなった。

サンモールの生徒たちは，ただお金を集めるだけの募金ではなく，まず緑の大切さを感じ，そして自分たちも何かしようと思った。どうして募金するのかということをたくさん考えてくれたのだと思う。

サンモールの皆さんありがとう。皆さんの寄付でエチオピアに2,500本の木を植えることができます。（金成）

研修生紹介

健康に仲良くやります　井本勝幸・美奈夫妻

井本くんが初めてJVCに参加したのは，'84年7月～10月のソマリア研修。当時，東京農業大学の学生だった彼は，その時「第三世界へ行くなら，農業以外にないと思って，ソマリアに行ったけど，次々と人が倒れていくのを見て，技術ではなく毎日元気に働くことの方が大切だと思った」そうです。

帰国後，農業技術者のグループ「JAST」を結成。JVCの現場や他の団体にも，メンバーを送り出したり，ソマリアに気象器具や種を送ったりと活躍しましたが，忙しすぎたのか，3年程で活動を停止してしまいました。

その後'86年8月から，千葉県東金市のJVC東金農場担当者として，農作業や地元と海外とのつなぎ役としてもやってきました。'87年には，東金のお百姓さんを連れて，カンボジアへスタディー・ツアーと活躍しましたが，'87年末には，ちょっと活動を休止して，東金農場を離れました。

今回，心身共に栄養をつけてきたので，初心に戻って海外の現場へ挑みたいとのこと。現場で仲間作りをしながら，チームワークの中で力を発揮していくことでしょう。

美奈さんはJVCに来た頃は，国内活動「始まるまで待てない」で活動をしていましたが，それに満足できず，'86年8月～9月，カオイダンで一カ月の研↗修をした元気娘。難民の生活や救援活動をしている人たちの生活などを知りたくて，好奇心いっぱいでの参加でした。研修終了後，東金農場に気持が傾いて活動してきましたが，'87年末に一時活動休止。この間は井本くんと共に元気をつけて，再度，海外の現場を希望してきました。

カオイダンでじっくり勉強して，自分たちでプログラムを作れるようになりたいとのこと。将来が楽しみです。お互い良きパートナーを得，新しい家族の誕生も控えて，しっかり地に足のついた活動を展開してくれることでしょう。

パナニコムへ行きます　坂井 真紀子さん

初めてJVCに来たのは，去年の7月。来たばっかりだったのに，環境会議の手伝いをする事になり，何が何だかわからないうちに巻きこまれてしまったとか。でも，もともとJVCのような仕事をやりたいと思っていたので，いろいろと悩みはしたけど，それまで勤めていた商社も辞めてしまいました。辞めてどうだったという質問に「辞めてすっきり！」とさっぱりとした返事。JVCについては，「するめみたいな感じ。かまないと味がでない。ボーッとしてると素通りしてしまいそうな団体だけど，自分でかんでみると味があります」とのこと。

初めての海外での仕事なので，不安はあるけれど，とにかくやってみなきゃわかりませんと，元気いっぱい。ずっと親元にいたので，親の方が彼女を手離すのに，心配なようですが，彼女に言わせると，「親も子供の親ばなれに，がんばって耐えてるみたいだし，今のところ好きにさせてくれてるから」と一応親子の間では，了解がとれているようです。きっと坂井さんの明るさと前向きな姿勢で，よい仕事ができることでしょう。　（柴田くす子）

JVCでは昨年も“アジア・アフリカの子供と未来にクリスマスプレゼントを”の募金活動を行い，3,409,800円（439名）もの支援金が寄せられました。JVCの5つのプロジェクトの子供たちのために大切に使わせていただきます。ありがとうございました。

JVCプロジェクト

1989年12月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計，総務，情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日　午後6時～8時 毎月第2，4土曜日　午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林　達雄（事務局長） 熊岡路矢，星野昌子，前川昌代，鴇田三芳，加藤志保，岩崎美佐子，富安光子，池島千津子，鈴木由子 アイネス・バスカビル
神奈川県 （JVC神奈川）	神奈川県内における渉外，事業計画，情報収集，資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画，運営。		山口誠史，
日本国内	**●定住難民プロジェクト** 12月9日，ケアハウスさくら苑より，秋祭りの「難民支援バザー」で得た収益金のうち，680,772円を寄付して頂いた。 12月22日，プロジェクト機関誌「もしもしあのね」第11号を発行した。 12月24日，埼玉県川口市の柳崎雇用促進住宅で，カンボジアの人たちとJVCボランティアの今村さん及び，CYRのボランティア等が中心となり，「年末パーティー」を行った。カンボジア料理，歌，ダンス，子供たちの笑顔を楽しんだ一日であった。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金，国際交流ホスピタリティトラスト，日本少林寺拳法連盟，ケアハウスさくら苑 チャリティーカレンダー	小野豪大，他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと，毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア （ウォロ州）	**●総合的復興促進（マーシャ）** 1. 植　林 山間部斜面での苗木の植えつけが終わった。女性たちが苗木を運び，男性たちが植えつけた。 2. 母子保健・栄養 1月からお母さん学校を始めているアダグイヤ地区で栄養調査を行ったところ，体重身長比で70%以下の子供が20%近くいることがわかり，集中的に家庭訪問指導を始めた。今さらながらにエチオピア村落の健康状態が劣悪なことが確認された。 3. エチオピア人スタッフの日本訪問 9月5日にエチオピア人2名が来日し，植林の意義を伝える寸劇などを用い，各地で活動報告を行った。エチオピアの目から見た日本の姿が，私達自身の暮らしの問い直しに役立った。	CRDA，WFP，犬養道子・みどり一本運動，モラロジーMIRC，東京グリーン・ウォーク，西本願寺，チャリティ・サイクル，Tree for lifeの会，中部善意銀行，朝日新聞厚生文化事業団，毎日新聞社会文化事業団 チャリティーカレンダー	鈴木直喜，山田　盛，江原浩昭，江原広美，田尻真由美，イエットベルク，ソロモン，バレタ，ダニエル，エシャトー，トーマス，シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ （ゲドー郡） ハルバ・キャンプ （ゲドー郡）	難民の再登録が本格化した。この再登録により，本国エチオピアに戻る者，ソマリアに留まり自活の道を歩む者とに分けられる。若干の混乱や妨害があるが，数ケ月以内に再登録は完遂される予定である。 **●農業による自立促進** 上記の再登録が，JVCの活動対象者にも多少の動揺を与えつつあるが，殆んどの者は淡々と農業に励んでいる。ただ，数カ月後には，エチオピアの故郷に戻りたいという農民も出ると予想される。	UNHCR， 仏国土をつくろう会	金子一弘，シアッド， ムハボ， 磯田厚子，中野周二， アオキ，アブディナサル， ヒレ，ラシッド
ジャララクシ・キャンプ （ヒラン郡）	この難民キャンプでも再登録が始まっているが，難民の多くは，オガデン族であるため，本国帰還が遅れる公算が高い。 **●農業による自立促進** 先回の収穫では，1家族あたり約2万円相当の換金作物と約50kgのトウモロコシがあった。	UNHCR R.I.-Japan	船川秀夫，シュクリ
カンボジア カンポット県 プノンペン カンダール県	**●サンタピエップ技術学校／ワークショップ** 87年8月から現在まで6台のトラックのエンジン・オーバーホールを終え，現在そのうち5台が稼動中である。ほかにブレーキを中心とした中程度の修理が約20台，熔接や塗装などの修理を入れると約150台のトラックの修理を行ってきたことになる。 カンボジア人スタッフは現在32名おり，その中には技術学校の第一期卒業生13名が含まれている。 第二期の授業は88年11月から一年間の予定で開始された。生徒はスタッフ23名で，孤児2名を含む。教育省より送られた2名は勉強を終えプルサットへ帰った。7月初めから，機械工，板金工，訓練生合計5名が新たに加わった。スタッフ等25名が4つのグループに分かれ，日本人技術者の指導のもとに実習をかねた車の修理を行っている。 8月下旬より新しいメンバーのグループを中心に理論の学習を始めた。また，三菱の部品が着き，訓練生を中心にしたグループからエンジンのオーバー・ホールを始めた。 今年度の目標は，生徒が実習の経験を十分に積めるようにするため，エンジン，車体すべてのほぼ完全な修理を20台以上行うことである。そのため，トラック10台分の新品のスペアパーツ，パッキン等，定期交換部品10台分が必要とされる。 **●RINE（ライン）プログラム〔母子保健活動〕** 9月から11月にかけて断続的に1ケ月間の村の助産婦卒後研修を行った。この研修から，母親カードを使用し始め，村の助産婦は妊娠の異常を早期に発見できるよう研修を受けた。次は伝統的産婆の1週間の訓練を計画している。 12月にプノンペン郡16ケ村で，村の一般的な実態調査を行った。これは村レベルでの保健活動を行うための基礎資料となる。 11月末よりプノンペン郡病院・RINEセンター敷地内で，小規模ながらFood Productionを始めた。今のところ野菜畑だけであるが，今後，魚の養殖，養鶏と進めていく予定である。作物は入院患者の食事，RINEの補助給食に使いたい。 **●井戸掘り・給水** 今年の計画は，30本の井戸を掘ることである。今までにプノンペン市内で7本，カンダール県内で10本（そのうち1本は水源に行きあたらなかった），コンポン・ソム市で6本の合計23本の井戸が掘られた。	創価学会青年平和会議，モラロジーMIRC，立正佼成会，日産労連，西本願寺，善興寺ダーナ基金，高岡寺族青年会，覚法寺，「チャリティ・ウオークかながわ」，毎日新聞大阪社会事業団，国際ソロプチミスト千代田，明るい社会づくり運動神奈川県協議会，浄土宗東京教区青年会，和平基金，国際保健協力市民の会（SHARE）仏教救援センター，四日市商業高校，日蓮宗宗務院，横浜市「世界ふれあいキャンペーン」，「お告げのフランシスコ姉妹会」，中部善意銀行，「カンボジア会」，チャリティーカレンダー，堺市ロータリークラブ，日本ボーイスカウト広島第20回全日本仏教青年会，カリタス・ジャパン，「第1回チャリティー・コンサート」，我孫子「ムダの会」	古西　勇，馬　清， 杉江美子，本橋　栄 〔カウンター・パート〕 （運輸省） タック・カン，アム・ディエン，メアス・サメット，ゲット・ソーン，カム・ボラ （保健省） アン・サルン医師 （カンダール県保健局） ニム・ニエム医師 （農業省水利局） セン・ロー

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務，会計，資金調達 ②各機関（国連，タイ政府，日本大使館，各国民間援助団体）及び東京事務所，ラオス・カンプチアを含む，各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集，広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 11月29日～12月２日，メーソットからメーホンソンにかけて点在するビルマの学生及び，カレニー，カレン難民キャンプを視察する。 12月４日，バンコクにて東京からのスタッフ３人を迎え，タイスタッフのミーティングをもつ。 12月20日～22日，ビルマの学生キャンプ視察のため，スリーパゴダパスへ行く。	全国社会福祉協議会 電力労連	ポンピモン，カモン，大石道子，チャタヴァデ 主婦ボランティア15名
カオイダン （カンボジア難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 現在，180名の生徒が一気筒エンジン，単車，自動車，溶接，大工などの技術訓練に励んでいる。 カオイダン・キャンプは，来年から本格的に本国帰還を準備するための機能を充実させていく。１月にJVCとUNHCRは，バン・タットキャンプからの受益者受け入れの交渉をJOC（タイ軍合同作戦本部）と持つ。	UNHCR， SV（Stichting Vluchteling）	清水　俊弘， ソムヨット・ラタナタム， スティ・ネップラコン， 久津輪　雅
パナニコム （第三国定住待ちキャンプ）	●日本語学校 ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育　②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・他国定住予定者へのプログラム ・12月６日，ひらがな学習を終了し最終テストを行いクラスを能力別に４クラスに分け，12日より新しいクラス編成で文型学習に入った。 ・ベトナム避難民の人口増加の為，特設収容区域の拡張工事が行われ，隣のラオス人居住区が移動させられた。 生徒数　ラオス　47名	天理教千葉 R.I.-Japan	竹村雅義，熊沢ゆり， チャワリット・ドゥワンポム
地域開発（CD） （バンコク市内のスラム地区） （プリラム県のM村）	●奨学金プロジェクト 奨学金スポンサーに子供たちからの年賀状を発送している。 ●クロントイ図書館 12月２日，主婦ボランティアの企画により，図書館で1，2，3地区の子供たちの為にクリスマス会を行った。 ●農村開発 来年１月～２月に，JVCラオスプロジェクトにかかわるラオス人のタイ・スタディーツアーが行われるが，その下準備・調査を行った。	モラロジーMIRC，Tree for lifeの会，雄勝町町内寺院会，国際ソロプチミスト駿河，長谷川勉チャリティーウォーク，JOFIC，電力労連，からし種，チャリティーカレンダー	コメン・スンスマン， リラ・クンナロン， サムルアイ・ ジョンヨークラン， 今泉　恵
ラオス （ヴィエンチャン県 ボーリー・カムサイ県 カンムアン県）	●生活改善指導員養成プロジェクト 第一回トレーニングは10月20日に終了し，研修生は生活改善指導員として出身地域に帰り，母子保健を中心とした普及活動を始めた。また地方の普及活動の拠点として計画した３つの母子センターの建設も順調に進んでいる。 現在，JVCのスタッフは地方の指導員を巡回して激励する一方，４月に始まる農業コースの準備にあたっている。１月末には農業コースのラオス人講師のための，東北タイ・スタディー・ツアーを計画している。	UNDP 庭野平和財団 難民と地球の緑を考える会 横浜インターナショナル・ウイミンズクラブ スコティッシュ・ナイト・イン ・専修寺 聖ヨゼフ老人ホーム	谷山博史，北詰秋乃， 原田恵津子 堺市ロータリークラブ， 老人ホーム天寿荘，チャリティーカレンダー

Trial & Error（試行錯誤トライアル・アンド・エラー）第96号
発行日　1990年1月20日発行（毎月20日発行）通巻96号
1982年8月16日第三種郵便物認可

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは－Japan International Volunteer Centerは1980年2月，タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの，インドシナ難民の大量流出をきっかけに，日本から駆けつけた若者と，現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり，現在の組織の原形ができました。JVCは，活動者の自発的な意志に基づき，日本の個人・団体からの寄付金，国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは，人種，国籍，習慣，宗教その他の信条の違いを越えて，難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について ── 会員は，総会に出席し，JVCの方針などを決定する他，情報・資料の入手，各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

・正会員（一般会員　10,000円　活動者会員　3,000円
　　団体会員　30,000円　学生会員　3,000円）
・賛助会員　金品による支援（金額は自由です。）

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について
・毎号1冊送付　年間購読料　3,000円
・毎号4冊送付　年間購読料　10,000円

▶送金の方法 ― 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
①会員：東京5-48365　加入者名－JVC会員係
②T/E：東京3-54186　加入者名－JVC東京事務所
（住所，氏名，購読開始月をお書き添え下さい。）

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動 ── 救援活動をより充実させるため，以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

A. アフリカ難民救援募金　（12月小計 265,466円）アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
B. グリーン・フォー・アフリカ募金　（12月小計 738,853円）アフリカの土壌回復，農業，植林等に使われます。
C. インドシナ難民救援募金　（12月小計 107,000円）タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
D. カンボジア募金　（12月小計 171,979円）カンボジア国内の復興のために使われます。
E. タイ・スラム募金　（12月小計 81,500円）バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
F. スラムの子供奨学金・基金（12月小計 364,500円）バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
G. タイ農村募金　（12月小計 113,800円）タイの農村開発のために使われます。
H. 定住難民募金　（12月小計 693,772円）定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
I. JVC運営経費募金　（12月小計 312,390円）現場を支えるのに不可欠な事務運営経費，人件費に使われます。
J. ラオス募金　（12月小計 290,717円）ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
K. 無指定募金　（12月小計1,391,276円）

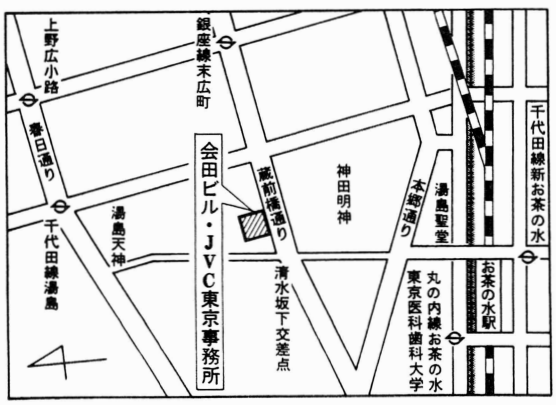
▶送金の方法－下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9－27495（募金種目名をご記入下さい。）
加入者名－JVC東京事務所

編集後記

▶JVCは，ちょうど10年の歳月を歩んだ。これから1990年代という時代と共に，新しい10年を始める。奇しくも，その最初のテーマがビルマになった。日本の政府援助がかならずしも肯定的な意味をもちえないビルマにおいて，市民団体としてのJVCは何ができるか。この問題を真剣に考えてこそ，新しい力がつくと思う。（しゅん）
▶仕事に追われてじっくり本を読む余裕さえ失い，なぜ私はこの活動をやっているか，見失いそうになる。気分転換が下手くそなため，まるで一日中仕事をしている気分だった。毎日接する誰かと正直で素直な心で，話し合いたい。不器用でもあせらずにマイペースで，続けていきたい。（池島）
▶今号からT/Eも再生紙を使用することになりました。

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497　（12月小計249名　2,829,095円）
犬養道子さんの御厚意により，JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。



1990年1月20日発行（毎月20日発行）
編集人　岩崎駿介　池島千津子
発行人　林　達雄
発行所　日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒113　東京都文京区湯島3－1－4　会田ビル5階
☎03（834）2388　FAX：03（835）0519
Telex：7604025　JVCHQ UC
神奈川事務所　〒231 横浜市中区山下町2　産業貿易センタービル9F　㈶神奈川県国際交流協会内　☎045（671）7082
印刷所　（株）ベスト・プリンティング
＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。